



37 漁柳春雨圖

鉄斎

— 水墨神韻 —

平成24年4月3日〔火〕—6月10日〔日〕

前期 4月3日〔火〕—5月6日〔日〕
後期 5月10日〔木〕—6月10日〔日〕

10時～16時 月曜日休館 但し4月30日は開館 翌日休館



53 雲山化城図

「神韻」とは詩書画など芸術作品のきわめてすぐれた趣きのことをいい、文人画家・富岡鉄斎（1836～1924）の水墨画には、神韻なる言葉をもって賞するに値する生氣に充ちた筆墨表現と墨色の美しさがある。

鉄斎は、若い頃より中国・南宋以来の山水画の系譜はもとより明清画のさまざまな画法、筆法を学び、吸収することに努めた。初期の硬質で繊細な線描は、晩年には太く大胆奔放な筆致となり、墨色の諧調は神韻を帯びてゆく。速筆で抑揚のある墨線は形態を的確にあらわし、微妙な濃淡は刻々と変化する気象や光、面をおもわせる黒々とした塊は岩肌や山となって、観るものに力強い存在感をもって迫ってくる。

鉄斎が水墨画に長じたのには、中国絵画の古法を習得し、独自の画風へと展開させていったことのみならず、「墨癖」と称するほど墨にこだわったことに相応するだろう。また鉄斎が優れた色彩感覚の持ち主であったことは、その冴えたる墨彩を豊かなものとした。

墨癖あり 「余、墨筆紙癖あり。海の内外を扱ばす。異製品に遇えば、必ず之を試験す。然るに文人墨客、価を論じて品を扱ばす。これ嘆ずべし。」と鉄斎は筆録「無用の用」（大正5・6年）に記している。墨筆紙癖とは文人の必需品文房四宝のうち、硯を除いた墨・筆・紙にこだわることをいい、現存する鉄斎の旧蔵品や記述等からはその嗜好をすることができる。墨については、世に名高い紀州藤代墨、江州武佐墨をはじめ、松花堂昭乗、狩野探幽、藤村庸軒、中林竹洞、山口素絢、木下逸雲所用の残墨、奈良の古梅園、京都の鳩居堂、名匠と称えられた和歌山の鈴木梅仙の墨、中国においては程君房、方于魯、曹素功、胡開文、詹大有など墨家の品、さらには朝鮮の天然墨や琉球の朱墨を蔵していた。



鉄斎の墨癖を語るうえで欠くことができない試墨帖が、82歳の筆になる《墨癖余筆帖》（辰馬考古資料館蔵 『鉄斎研究』55-16）である。所用墨のうちから和墨、唐墨、名家の墨16種を選んで、それぞれの墨に関する故事由来を述べ、その墨を用いて対になる画を描いている。また墨癖と同じく自ら誇る「印癖」は広く知られるところであるが、所用印から画題に適う26種の印を捺すもので、鉄斎の趣向を見ることができる。画題によって墨を選び、その特質を活かした多彩な筆墨表現を試みることは、自身の学問的思考に基づいて画を構築する鉄斎にとってはごく自然なことであったと考えられる。

《松花堂幽居图》（No.17）は、寛永の三筆と称される松花堂昭乗（1582～1639）が、男山山中の坊内に建てた方丈松花堂で幽居する姿を、統本に墨と淡彩で描いた佳品である。賛には交友のあった沢庵宗彭から昭乗に贈られた紹陽所持の名墨とそれに添えられた和歌および返歌、牧溪墨墨拓（挿図1）、そして識語には「松花堂所用の墨を用いてこれを写す」としている。鉄斎はこの画に用いた「牧溪墨」（No.71）の由来について、筆録「題画小稿」に一文を記しており、これによると奈良に遊んだ時に古梅園11世松井元淳を訪れ、天明年間に古梅園が模造した牧溪墨なる墨を贈られたが、試みに磨ってみるとその墨色は佳くなかった。元淳が言うにはそれは形を模して神を略していると。天下の模造品は皆このようで、それは墨に限ったことではないと鉄斎は嘆いているのである。しかし墨色が原本におよばない模造の品であっても、画僧牧溪が用い、室町時代の茶人武野紹鴎から沢庵和尚、松花堂に伝来したという由緒をもつこの墨を鉄斎は気に入り、松花堂や牧溪を題材とした作品、あるいは画法に学ぶとする画で愛用し、時には墨拓を添えて一図とした。ちなみに鉄斎は別に松花堂所用と伝わる残墨一片（No.85）も愛蔵していて、この墨を用いた作品も遺されている。

牧溪の法に仿う 大正9年(1920)、中国の考証学者・羅振玉(1866~1940)から鉄斎のもとに書簡が届く。辛亥革命後に来日し、京都に寓居していた羅振玉とは息富岡謙蔵(1873~1918)を通じて親交を深め、帰国後も交流は続いていた。書簡には「貴国友人之便携奉石印一枚旧墨八挺敬求」とあり、石印一顆と八挺の旧墨(古墨に同じ)が贈られたことがわかる。このとき描かれたのが《漁邨暮雨図》(No.37)である。賛には「羅振玉翁は中国の老儒である。私に手紙を寄せ、そのうえ一つの印を贈ってくれた。その石は大変珍しく、印文もすぐれている。印文に「願書萬本誦萬遍(願わくば万本を書し、万遍を誦せん)」とある。私はうれしくてたまらず、試みに牧溪の画法に仿ってこの図を描き、この印を捺した。」とし、自身の信条と合致する印を贈られた喜びが伝わってくる。残念ながら墨については触れられておらず、該当する品も現在のところわかっていない。だが、この画が牧溪の澆墨の法に仿った墨画であることを鑑みると、贈られた古墨を喜んで試墨したのではないかと推察される。



挿図1 牧溪墨墨拓

鉄斎の水墨画にはこうした「牧溪の法に仿う」と識語する図がみられ、《漁邨暮雨図》はもとより《鯉魚図》(No.25)、《猿猴捉月図》(No.59)、《澆墨山水図》(清荒神清澆寺蔵『鉄斎研究』72-8)などがその画法に学んだ作である。牧溪は宋末元初の画僧で、日本の絵画史のなかで最も高く評価されてきた水墨画家の一人である。しかし牧溪の代表作《観音猿鶴図》(大徳寺蔵)や瀟湘八景図にみられる湿潤な大気が漂う水墨画を想起するとき、「牧溪の本に仿う」とする鉄斎作品の力強い趣に戸惑いを覚える。おそらく鉄斎は牧溪の画風に追随することを旨としたのではなく、用墨の法を自身のなかで昇華させ、その精神性を画のなかにあらわそうとしたのだろう。同様のことは「東坡の作、朱梅に髣う」と識語する《朱梅図》(No.56)にもいえ、敬愛する宋代の文人蘇東坡の強靱な精神を、筆墨のなかに込めたと思われる。

墨を選んで苦心 墨顔となる 「私は苦心して良墨を選んで墨顔(墨に心を奪われる人)となった。その墨水を縦横自在に紙上にそそぐと、それが雲煙のように画面にひろがる。筆の穂先が煩惱を砕破する金剛杵の如く、俗気俗習を打破するということが誰が理解しているか。残念ながら現代の画家たちは誰ひとりとして秀れた古人を学んでいる者がいないのだ。」と、鉄斎は《十六羅漢画卷》(No.21)の跋文に書している。出典は『国朝画徴録』巻下に収載されている清の王原祁(1642~1715)の伝で、絵画の意義を説くものである。

横長の画面に展開する岩窟のなかに、くつろいだ姿の十六人の羅漢が坐す。筆墨から創出される造形は雲煙のようにひろがり、墨線は伸びやかで墨色は澄んで美しい。この画で鉄斎が用いたのは、和歌山県田辺の製墨家・鈴木梅仙(1836~1918)に依頼し特製してもらった「金剛杵墨」(No.80)なる墨であった。命名の由来については《金剛杵画賛》(『鉄斎研究』13-9)や《鉄叟画話》(No.28)の第10面に記述があり、いかに梅仙の墨が鉄斎の心を捉えていたかがわかる。梅仙は古墨の研究・改良に取り組み、優れた品質の墨の開発に成功、「梅仙墨」は勝海舟、橋本雅邦、横山大観、犬養木堂等、多くの墨客に愛好された。鉄斎と親交を結ぶ契機については定かでないが、為書がある作品としては、明治31年(1898)6月に鉄斎が大和吉野山麓に滞在中に描いた《寿老人図》が



21 十六羅漢画卷(巻末部分)

確認されている。梅仙は鉄斎のために「一品玄香墨」(No.78)、70歳^{ふじ}の古希^{こき}を祝して「古稀墨」(No.79)を特製しており、大作《富士遠望図・寒霞溪図》(京都国立近代美術館蔵『鉄斎研究』16-14)、《雪・月・花・茶詩書》(京都市美術館蔵『鉄斎研究』3-15)などが梅仙墨を用いて制作された。

また、若いときより親交のあった京都の熊谷鳩居堂が、鉄斎のために製作した「鉄斎清賞墨」(No.75)は今日もなお愛好されているが、その鳩居堂製の書画用の墨をもって描かれた《雲龍図》(『鉄斎研究』54-16)、五百斤油墨が用いられたのが《富士山図》(『鉄斎研究』54-17)である。《墨發異気図》(『鉄斎研究』64-12)は、製墨家・山田墨農^{ぼくのう}が製作した「有信墨」を用いたという識語あり、画は『方氏墨譜』巻三に所収の図に拠るとする。墨農は鉄斎のために「東坡法墨」(No.81)なる墨を特製している。そして先述の試墨帖《墨癖余筆帖》には、鉄斎は『画学心印』巻八に所収される金冬心^{きんとうしん}の「五百斤油墨」を欲し、息謙蔵^{きせんざう}が中国に行った折に搜索させて手に入れたものの模倣墨であり、金冬心の旧物ではないことを書き記している。このようなことから、鉄斎が自身の書画に適した上質な墨にこだわり、佳墨との出会いに触発されて創作を試みたことがしられる。

なお、著名な中国曹素功製「鉄斎翁書画宝墨」(No.87)については、現在のところ鉄斎の記述や作品等が未確認ではあるが、側面に「中華民国徽歙曹素功堯千氏製」「日本高島屋支那文房具発売」とある鉄斎旧蔵の墨が、製作の経緯を解き明かす手がかりとなろう。

墨彩と彩色 中国晩唐に『歴代名画記』を著した張彦遠^{ちやうげんえん}は、名家の水墨について「墨色を用いて五彩を兼ねるが如し」と評している。この五彩とは、すなわち墨一色の濃淡濁潤によって全ての色を超越する無限の変化をいうのである。鉄斎80歳代の水墨画の代表作にかぞえられる《東瀛神境図》(No.29)や《雲山化城図》(No.53)は、中国山水画の構築性に法^{りつ}って胸中の丘壑を描きあげるもので、画面全体に重層的に塗り重ねられた墨色は澄み、五彩を感じさせる。

一方、鉄斎の水墨画の最も特徴的な表現として、墨の中に効果的に彩色を用いた作品がある。《弘法大師在唐遊歴図》(No.62)、《普陀落山觀世音菩薩像》(No.64)は、墨彩のなかにわずかに施された代赭^{うんごんけい}が画面に清涼感をもたらしている。また《東坡帰院図》(No.31)や《読書立志図》(No.36)は、墨一色で夜の大気を表し、蠟燭に灯る朱色がほのかに周りを照らした。淡雅な彩色が、墨彩で描かれた部分に色を感じさせる効果を生んでいる。さらに豊穡な色彩を醸し出す《瀛洲僊境図》(No.68)、《扶桑神境図》(No.69)は、墨と色とが互いを妨げず両者が引き立てあう。こうした墨彩の妙と優れた色彩感覚が鉄斎芸術の精華であるといえるだろう。

本展では、墨色の美しさと筆墨表現に定評がある鉄斎晩年の珠玉の名作を中心に、あわせて所用の墨も紹介する。鉄斎が墨色にあらわした神韻の境地をおたのしみいただければ幸いである。(柏木知子)

[参考文献]

井川定慶『随筆松花堂』(立命館出版部 1939)/小高根太郎『富岡鉄斎の研究』(芸文書院 1944)/張彦遠・長廣俊雄註『歴代名画記』2(『東洋文庫』311 平凡社 1977)/王耀庭『中国絵画のみかた』(二玄社 1995)/野中吟雪『鐵齋の書』(新潟大学野中吟雪教授退任記念事業実行委員会 2007)/柏木知子「鉄斎の富士」(鉄斎美術館『鉄斎美術館開館35周年記念特別展』図録 2010)



28 鉄雙画話 第10面



80 金剛杵墨 富岡鉄斎原書 鈴木梅仙製

《出品目録》

番号	名 称	制 作 年		年 齡	寸 法	材 質・彩 色	員 数
1	烟霞幽情図	元治1	1864	29	98.5×31.9	紙本淡彩	1幅
2	蔬菓図	慶応2	1866	31	15.8×244.0	紙本墨画	1卷
3	層巒雨霽図	慶応3	1867	32	125.6×39.5	紙本墨画	1幅
4	花卉図	明治2	1869	34	125.4×41.9	紙本墨画	1幅
5	溪山真楽図	明治7	1874	39	178.3×60.0	紙本淡彩	1幅
6	竹窓聴雨図	明治8	1875	40	171.5×66.4	紙本墨画	1幅
7	淡彩山水図	明治11	1878	43	149.7×68.0	紙本淡彩	1幅
8	層巒烟雨図	明治15	1882	47	155.2×41.4	紙本淡彩	1幅
9	古うつの蔦の細道図	明治23	1890	55	31.0×324.4	紙本淡彩	1卷
10	野亭遊客図	明治27	1894	59	180.5×97.0	紙本墨画	1幅
11	溪山雪霽図			50代	140.5×39.0	紙本淡彩	1幅
12	仁者楽山図			50代	159.0×61.0	紙本淡彩	1幅
13	桃華僊館図巻	明治35	1902	67	18.0×380.0	紙本淡彩	1巻
14	名所十二景図	明治37	1904	69	各138.0×51.9	紙本着色	6曲1双
15	晃山勝区図			60代	各17.6×23.4	紙本淡彩	1帖
16	幽崖芝蘭図			60代	123.3×46.9	紙本墨画	1幅
17	松花堂幽居図			60代	124.0×29.0	紙本淡彩	1幅
18	堰川泛舟図			60代	14.0×177.2	紙本墨画	1巻
19	觀世音菩薩像	明治39	1906	71	137.8×70.5	紙本淡彩	1幅
20	石翁逍遥図	明治42	1909	74	135.0×48.6	紙本淡彩	1幅
21	十六羅漢画巻	明治42	1909	74	19.4×345.5	紙本淡彩	1巻
22	人生行楽図	明治44	1911	76	124.8×40.6	紙本墨画	1幅
23	富士山図	大正1	1912	77	50.8×61.7	紙本墨画	1幅
24	長椿古石図	大正1	1912	77	133.0×60.0	紙本墨画	1幅
25	鯉魚図	大正3	1914	79	143.8×40.7	紙本墨画	1幅
26	秋声賦意図			70代	141.5×69.7	紙本淡彩	1幅
27	踏雪沽酒図			70代	128.7×33.5	紙本墨画	1幅
28	鉄叟画話			70代	各21.4×30.5	紙本淡彩	1帖
29	東瀛神境図	大正4	1915	80	150.4×81.4	紙本墨画	1幅
30	鹿門帰隠図	大正4	1915	80	37.7×123.0	紙本墨画	1面
31	東坡帰院図	大正6	1917	82	132.8×32.3	紙本着色	1幅
32	大瀑図	大正6	1917	82	144.2×87.0	絹本墨画	1幅
33	幽溪帰樵図	大正6	1917	82	129.6×32.5	紙本淡彩	1幅
34	鞆川雪景図	大正8	1919	84	133.6×64.4	紙本淡彩	1幅
35	二僊授受図	大正8	1919	84	151.0×40.4	紙本淡彩	1幅
36	読書立志図	大正9	1920	85	132.0×34.5	紙本淡彩	1幅
37	漁邨暮雨図	大正9	1920	85	131.0×32.3	紙本墨画	1幅
38	蓬萊群僊会図	大正9	1920	85	190.5×58.4	紙本淡彩	1幅
39	歲寒二雅図	大正9	1920	85	132.3×33.6	紙本淡彩	1幅
40	笑傲煙霞図	大正9	1920	85	173.0×46.9	紙本墨画	1幅
41	東坡謁仏印図	大正9	1920	85	133.0×33.6	紙本淡彩	1幅
42	瀛洲僊境図	大正10	1921	86	130.5×32.1	紙本淡彩	1幅
43	吉野乃面影図	大正10	1921	86	123.2×30.6	紙本墨画	1幅
44	雲關石門図	大正10	1921	86	131.7×54.3	紙本墨画	1幅
45	蘇子談癖図	大正10	1921	86	131.8×32.1	紙本淡彩	1幅
46	僊游蓬萊図	大正10	1921	86	50.8×63.8	紙本着色	1幅
47	孫真人山居図	大正10	1921	86	145.9×40.4	紙本着色	1幅
48	売書船図	大正11	1922	87	130.0×32.1	紙本淡彩	1幅
49	如南山之寿図	大正11	1922	87	131.3×32.5	紙本墨画	1幅
50	三尊窟蹟図	大正11	1922	87	168.6×42.9	紙本墨画	1幅
51	嫦娥奔月図	大正12	1923	88	132.6×53.6	紙本淡彩	1幅
52	瓢中快適図	大正12	1923	88	132.2×31.8	紙本淡彩	1幅
53	雲山化城図	大正12	1923	88	133.5×33.5	紙本墨画	1幅
54	西王母像	大正12	1923	88	131.0×47.0	紙本着色	1幅
55	層巒僊閣図	大正12	1923	88	146.5×40.3	紙本墨画	1幅
56	朱梅図	大正12	1923	88	150.4×40.1	紙本淡彩	1幅
57	松芝不老図	大正13	1924	89	150.3×40.0	紙本淡彩	1幅

58	対山医俗図	大正13	1924	89	169.8×41.2	紙本墨画	1幅
59	猿猴捉月図	大正13	1924	89	131.0×32.1	紙本墨画	1幅
60	蘇斜川図	大正13	1924	89	134.5×33.5	紙本淡彩	1幅
61	米老幽栖図	大正13	1924	89	131.8×33.3	紙本墨画	1幅
62	弘法大師在唐遊歴図	大正13	1924	89	132.9×33.3	紙本淡彩	1幅
63	西湖全景図	大正13	1924	89	141.2×39.0	紙本淡彩	1幅
64	普陀落山観世音菩薩像	大正13	1924	89	89.3×32.8	紙本淡彩	1幅
65	富士山図	大正13	1924	89	34.8×126.5	紙本墨画	1面
66	聖者舟遊図	大正13	1924	89	143.8×39.6	紙本淡彩	1幅
67	能因法師図	大正13	1924	89	128.8×38.2	紙本淡彩	1幅
68	瀛洲僊境図	大正13	1924	89	142.6×40.2	紙本着色	1幅
69	扶桑神境図	大正13	1924	89	144.5×39.3	紙本着色	1幅

[鉄斎所用墨] 寸法=縦×横×厚

番号	名称	制作者	制作年	生産国	寸法	備考
70	後素必用墨	古梅園七世 松井元彙製	江戸	日本	8.7×2.1×1.2	用南蘋沈氏秘法製
71	牧溪墨	古梅園製	江戸	日本	7.7×2.6×0.9	松花堂真方
72	大哉布袋墨	古梅園製		日本	9.4×3.9×1.3	狩野探幽原画
73	江州武佐墨	鳩居堂製		日本	11.9×3.2×0.6	模造
74	竹洞清玩墨	鳩居堂製	江戸	日本	7.7×2.3×1.2	中林竹洞遺墨 贈山田墨農 鉄斎箱
75	鉄斎清賞墨	鳩居堂製	明治～大正	日本	10.8×2.0×1.2	鉄斎原書
76	百寿墨	鳩居堂製	大正12年(1923)	日本	15.3×3.4×1.6	鉄斎原書
77	魚形梅仙墨	鈴木梅仙製	明治～大正	日本	7.8×2.7×1.2	鉄斎箱
78	一品玄香墨	鈴木梅仙製	明治～大正	日本	9.7×2.9×1.2	鉄斎原書
79	古稀墨	鈴木梅仙製	明治38年(1905)	日本	6.4×3.2×0.9	鉄斎原書
80	金剛杵墨	鈴木梅仙製	明治～大正	日本	7.2×3.1×1.0	鉄斎原書
81	東坡法墨	山田墨農製	明治～大正	日本	8.9×5.1×0.8	鉄斎箱
82	倣東坡法墨	山田墨農製	明治～大正	日本	7.3×4.1×1.1	鉄斎箱
83	寿墨	南山藤白製	江戸	日本	径9.1 厚1.6	
84	紀伊千里浜天然墨			日本	3.8×4.2×1.3	贈鈴木梅仙
85	松花堂昭乘所用残墨				4.4×4.5×0.8	鉄斎箱
86	山口素絢所用残墨				4.4×4.2×1.3	贈並河靖之 鉄斎箱
87	鉄斎翁書画宝墨	曹素功製	中華民国	中国	11.5×3.3×1.2	鉄斎原書
88	五百斤油墨	曹素功製	中華民国	中国	9.5×2.3×1.1	
89	印形墨	胡開文製	清	中国	縦7.4 径2.6 他	鉄斎箱
90	朝鮮墨			朝鮮	13.0×4.0×0.9	鉄斎箱
91	朝鮮固有用墨			朝鮮	10.8×4.0×1.2	贈梅原未治
92	琉球古朱墨			琉球	大4.7×2.2×0.5 小3.5×1.9×0.4	贈杉浦丘園

・出品作品は期間中下記の通り2回に分けて展示します。但し一部作品は重複することがあります。

前期 4月3日(火)～5月6日(日) 後期 5月10日(木)～6月10日(日)

・下記の日程で学芸員による展示説明会を行います。

4月21日、5月19日 各土曜日の午後1時30分より

・次回展覧会 「鉄斎の粉本(仮称)」

平成24年9月1日(土)～10月8日(月・祝)

清荒神清澄寺 鉄斎美術館 〒665-0837 宝塚市米谷字清シー番地
TEL (0797) 84-9600
FAX (0797) 84-6699
<http://www.kiyoshikojin.or.jp>

「鉄斎—水墨神韻」展
特別出品リスト

※寸法=縦×横×厚

●鉄斎所用墨

名称	制作者	制作年	生産国	寸法	備考
御墨	古梅園 六世松井元泰製	江戸	日本	8.8×2.0×1.3	鉄斎書付
駢錠	古梅園製		日本	9.7×2.2×0.8	
坡公義墨	古梅園 八世松井元孝製	江戸	日本	10.2×2.8×1.3	
奈良産胡麻油墨			日本	8.9×6.7×1.6	
油煙墨	栄寿堂製	明治—大正	日本	11.1×3.1×1.1	
二諦坊古璽墨			日本	7.1×2.0×1.3	
南都墨	鳩居堂製		日本	8.4×2.0×0.9	
白檀油煙墨	鳩居堂製		日本	10.8×2.5×1.3	鉄斎箱書
養素齋墨	鳩居堂製	明治—大正	日本	12.1×3.5×1.7	今尾景年原画 富岡鉄斎原書
琉球古朱錠			琉球	6.7×1.7×0.7	鉄斎包書
朱錠			中国	8.3×1.8×1.4	鉄斎箱書
九節菖蒲憩館墨	曹素功製		中国	7.9×2.2×1.0	
墨磨人墨	胡子卿製	光緒11年(1885)	中国	8.8×3.6×1.4	鉄斎箱書
龍徳御墨(複製)		中華民国	中国	15.3×6.3×1.9	

●鉄斎所用硯

名称	制作者	寸法	生産国	備考
墨海		18.8×18.8×25.5	中国	鉄斎箱書・松本香雨贈
墨池		39.6×21.7×2.1		鉄斎箱書・東坊城徳長贈
円月硯 銘魁		24.5×24.5×3.8		硯蓋鉄斎書
端溪硯 銘一気呵成		26.5×14.8×2.5	中国	硯蓋鉄斎書
硯盆(薩摩竹根) 銘虚船	中島菊斎	38.0×24.9×5.6	日本	盆裏鉄斎書・前田正名贈
東坡硯		26.0×16.3×2.0		鉄斎箱書・高野山龍光院主諦見贈
梅花硯		26.5×14.8×2.5		硯蓋箱書鉄斎書・谷口靄山遺愛
硯淵	天下一赤間関住 大森土佐守	17.1×10.0×2.0	日本	鉄斎箱書
鉄硯	藤義軒製	15.1×15.1×2.3		鉄斎箱書・松浦武四郎贈
伊香保産松化石硯		14.2×13.0×3.0	日本	鉄斎箱書 永平寺日置黙仙遺物
墨池		24.1×15.6×5.9		硯蓋鉄斎書